

2月3日 柗鰯

子どもの頃、近所の川によくフナ釣りに出かけていた。海が近かったこともあってか、2月頃になると大量のイナ（ボラの幼魚）が川面を覆い尽くすように泳いでいた。何度か釣り上げたことがあったが、フナとは違い寸胴の上に頭が逆三角形で、決して見栄えの良い魚ではない。

ボラは出世魚で、関西では「ハク→オボコ→スバシリ→イナ→ボラ→トド」の順に名前を変える。子どもの幼いさまを「おぼこい」、粹な姿を「いなせ」、行き着いたところを「とどのつまり」というが、こうした言葉が生まれるほど、ボラは身近な魚であった。

さて、例のごとく理科のA先生がニコニコしながら校長室に入ってきた。「校長先生、柗鰯の鰯はもともとボラだったそうですよ。土佐日記に記述があるそうです。知っていましたか?」全くの初耳だったが、その話を聞いて「イナ」が群れをなして泳ぐ様が目に浮かんだ。なるほど、節分に鰯の頭はピンとこなかったのだが、もともとボラの頭を魔除けに使ったというのは季節柄納得がいく。

節分はもともと季節の変わり目を意味する言葉で、江戸時代以降は特に立春の前日を指すようになったとか。新年を迎えるにあたって魔（鬼）をよけるため、トゲのある柗の葉とボラの頭をしめ縄にさしたのが由来という。ボラは漢字で書くと「鰯」で、邪が入るのを留（と）めるという意味があったようだ。江戸時代以降はボラよりも手に入りやすい「鰯」を用いるようになった。

大衆魚であった鰯も、不漁のため一時は1尾1000円以上の値がついた。「鰯」の次は何に変わるのだろう。そのうち養殖で値の下がったかつての高級魚が、柗と並べられる日が来るかもしれない。

